

昔ながらの米づくりを体験

一味同心塾で 稲刈り体験交流



▲ みんなでハデに稲掛け

さわやかな秋晴れとなった九月二十二日、料理研究家・中村成子先生が館長を務める一味同心塾の田んぼで昔ながらの米づくりを実践する稲刈り体験交流が行われました。今年五月に田植えを行い、これまで地元の方で構成する「仁多米づくり実行委員会」が中心となって、農薬や化学肥料を使わない昔ながらの米づくりに取り組んで管理を行ってきました。

今回は、町内はもとより海士町や遠くは東京から約四十人が参加しました。参加者は鎌やバインダーを使って稲を刈り、田んぼに掛られた七段の立派なハデに掛けられた稲は、秋の日差しを浴びて黄金色に輝いていました。お昼には、仁多米のおいしいおにぎりと中村館長の手料理が振る舞われ、参加者はご馳走に舌鼓を打ちました。参加者からは「来年もぜひ参加したい」、「貴重な体験を通して、食に対する意識が変わった」などの声が聞かれました。

今後も田植、稲刈り体験を通して、交流の輪が広がることでしょう。

将来の町の教育を考える

より良い教育環境に向け検討委員会を設置

町内の小中学校、幼稚園の適正規模と学校配置の在り方を検討する「学校再編基本計画検討委員会」が設置され、九月二十日、初会合が横田庁舎で開かれました。

検討委員会には、学識経験者や町の教育関係者、町議会議員、幼稚園・小中学校の保護者や地域の代表などで構成された三十六人で、委員長に島根大学教育学部の肥後功一教

授、副委員長に町自治会長会連合会長の中林英清氏が就任されました。

委員会に先立ち、臨床心理学の専門家で、山陰各地の学校再編の委員として活躍しておられる肥後教授から「子供たちの育ちと地域の教育課題」と題した基調講演があり、大学での研究実例や子供達の成長に教育機関がどのような役割を果たし、家庭や行政がどう支えていくかといった話があり、出席者は将来の町の教育のあり方について熱心に聴講していました。



▲ 若槻教育長(右)から肥後委員長(左)へ諮問されました

増加し、今後改築及び耐震化が必要で、厳しい財政状況を考慮すると、教育環境を総合的に検討していく必要があります。

委員会ではあわせて、就学前児童の幼児教育の充実を図る観点から、町内の四保育所と九幼稚園についても、その具体的な方策を検討します。

今後、子供達により良い教育環境と魅力と活力のある学校づくりを提供するため、作業部会による資料収集や、各層の幅広い見地から検討が加えられ、平成二十年四月までに中間答申が示される予定です。



▶ 初会合の様子

現在、全国的な少子化の中、奥出雲町においても児童生徒の減少に伴い、小中学校及び幼稚園の小規模化が進行し、今年度十人以下の幼稚園が二園、三十人以下の小中学校が二校あり今後もさらに減少が見込まれる状況です。

また、建築後相当年数を経過する学校が次第に